



「見たり、聞いたり、探ったり」No.307

通算 No.458

青 木 行 雄

一天孫降臨神話より― 伝「天児屋根命」という神様 鹿児島へ山稜参拝の旅へ。

この「天児屋根命」神様は、奈良の春日大社の第三殿に祀られている神様であるが、こんな日本神話で活躍していた。

これも天岩戸神話で、天照大神の岩戸からの御出現を願い、八百万の神々を代表して、祝詞を奏上されたことは広く知られているが、その後、天照大神の命令で「瓊瓊杵尊」が高天原より天下られる天孫降臨神話では、五伴緒神の筆頭として天孫に随伴し地上に下られた。

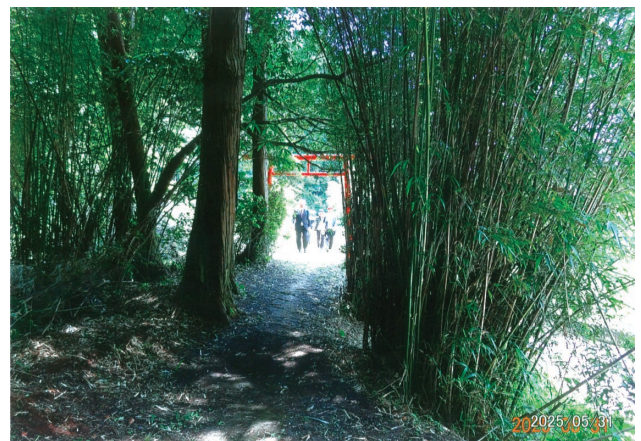
天孫降臨神話から

古代、九州南部（現在の宮崎・鹿児島両県）を総称し日向と呼んでいた。律令制の成立に伴い日向国が置かれたが、702年（大宝2年）に薩摩国、続いて713年（和銅6年）に大隅国がそれぞれ日向国から分国した。日向は皇室発祥の天皇家にとっては父祖の地であるが、熊襲の神話や隼人の反乱もあり朝廷にとっては支配に難渋した地域でもあった。反乱の時期はちょうど「古事記」・「日本書紀」の編纂とも重なり、神話の内容に影響しているとされている。

「古事記」によると、天照大神の孫神にあたる瓊瓊杵尊が地上に降臨される際、八咫瓊勾玉・八咫鏡・草薙剣の三種の神器を携えられ、中臣の祖神、天児屋根命・布刀玉命・天宇受売命・伊斯許理度売命・玉祖命の五伴緒の他、思金神、手力男神、天石門別神、登由宇気神、他多くの神々を随伴された。途中、



鹿児島せんだいの川内市水弓村の農村風景。まだ田植の前だった。人気のない農村に今日は大勢の人が来た。



草ぼうぼうの所、人間が通れるように村人ががんばっていただいた山道。



この小さな山道の石段もきれいにされていた。石段の上に赤い小さな鳥居が見える。昔は大きな大木があったと記されていた。



「天児屋根命」をまつる神社。屋根だけ、きれいに換えられている様である。



この神前にて祝詞を上げ、おはらいする。この神社の宮司がいないため、近くの新田神社の神職が祝詞を上げてくれた。

天の浮橋を経て、筑紫の日向の高千穂の久士布流多気に下りられた。

降臨されたとされる高千穂の代表的な伝承地は鹿児島県と宮崎両県の2ヶ所にある。

その2ヶ所とは。

- ①「薩摩風土記」逸文にある日向国曾於郡高茅穂穂生峰、現在の鹿児島と宮崎の両県に跨る霧島火山群の高千穂野の峰。
- ②「日向国風土記」逸文にある「臼杵郡内知鋪郷、現在の宮崎県西臼杵郡の高千穂である。

その後、瓊瓊杵尊と木花開耶姫との結婚・海幸山幸・豊玉毘売・神武東征と神話は展開するが、これらの伝承地は鹿児島・宮崎両県各地に広く分布している。

このような神話にしたがいこの度、①での「薩摩風土記」の鹿児島を探索した旅となった。

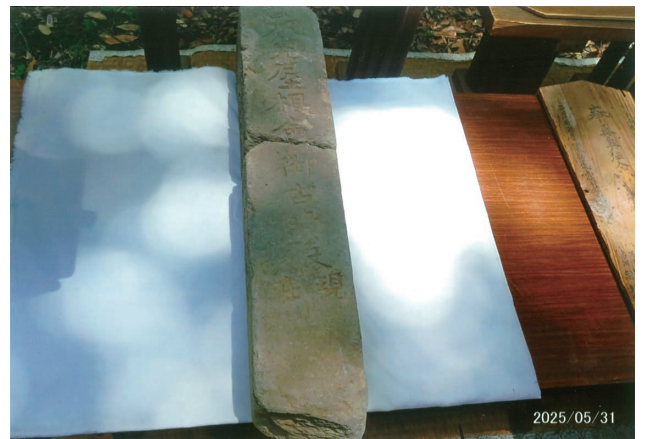
奈良春日大社の明治39年の社務日誌に、鹿児島県薩摩郡西水引村小倉(現薩摩川内市内)に所在する「射勝神社」を「天児屋根命」の墳墓とする記事があった。

いすぐりじんじゃ 射勝神社
せんだい し お ぐらまち 薩摩川内市小倉町
あめのこやねのみこと
祭神「天児屋根命」鎮座

いすぐり 射勝神社は新田神社から北西、国道3号線を熊本方面に約5キロ進んだ谷合に水田が広がる田園地帯



皆様が拝見するために並べていただいた貴重な名札や資料などが見られた。



この写真ではわからないが「川内の棟札」で、記載書を見ると「天児屋根命降誕地奉加衆靈牌位轅合安置所」と書かれていると記されている。

で、川内川からは支流小倉川を2キロ^{さかのぼ}った所であった。

地元では射勝殿と呼ばれ、神社の背後の丘陵の頂上には「天児屋根命」の墳墓石碑が拝殿で保管されていた。

この神社の近くの「新田神社」が薩摩一宮神社で、天照大神の孫神にあたる「瓊瓊杵尊」^{にぎのきみこと}を主祭神とする神社でなかなか立派な環境の一宮神社らしい、一ノ鳥居から山上の社殿に向かって真っすぐ桜並木の参道が延びすばらしい神社であった。

今回の目的は奈良春日大社、第三殿の「天児屋根命」神様が天孫降臨神話の聖地をさぐる旅であったので、この「射勝神社」のことについてもう少々探って書いて見た。



関東と関西・奈良よりの参加者による「天児屋根命」神様に祭事と神詞を上げる様子。

案内書の中にこんな書があった。

社は川内の水引村川底(住所)にあり。昔の八丸城址に在り。社殿は小高き台地に在りて、昔は大木繁茂し居たれど今や切倒されて少し残れるのみ。国道より遙かに見ゆ。起源は往古、天児屋根命、皇祖天照大神の御詔勅を執行し賜ひ、該命が薨去にいたる迄、経歴の地にして即ち該命の霊牌安置奉斎の廟所とす。毎年旧暦十一月七日祭典を執行す。

此の神社に射勝と名付けたるは、戦役に出陣する我が川底部落の者は、決して戦死負傷することなく必ず凱旋す。之はその神社の神様が戦場に共に御出現になられて御守り下さるとか言ふ事からなりと。故にその武の御神として強き神様なりと部落の者は信じて、今も参拝者あり。それ故古人は射勝と付けしとか。

これが「川内地方を中心とする郷土史と伝説」

写真で見るように田舎の風景がなんとも郷愁を誘う旅であった。

我々が訪問する事を事前に連絡でこの川底の村人は総出にて草刈や環境整備に大変な苦勞をおかけしたのではと感謝している。

日本神話や天孫降臨神話等九州は多くの聖地があるが、趣味や興味のある人にはたまらない、みぶるいする程見る所が沢山ある。

他に霧島神宮、加治木春日神社、鹿児島神宮、新田神社、等何神社か参拝した。

たまには東京と仕事をはなれ、神仏に感謝し夢のような神話に浸って見るのも人生の栄養と私にとっては生の記事が書けてうれしい機会でもあった。

令和7年5月30日

参考資料

春日大社案内書より